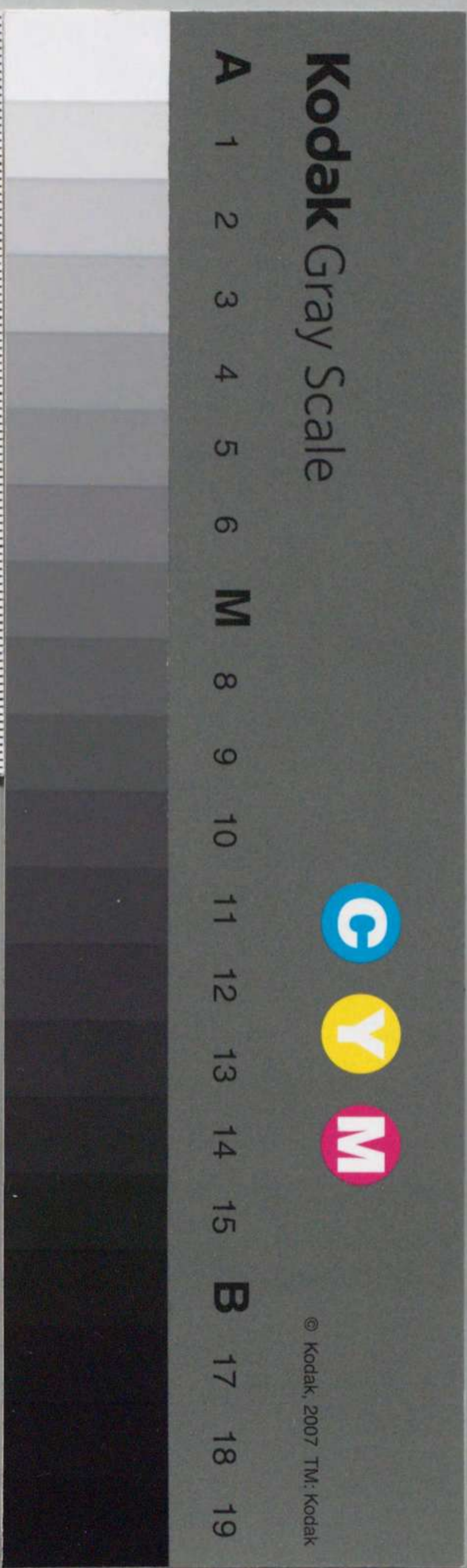


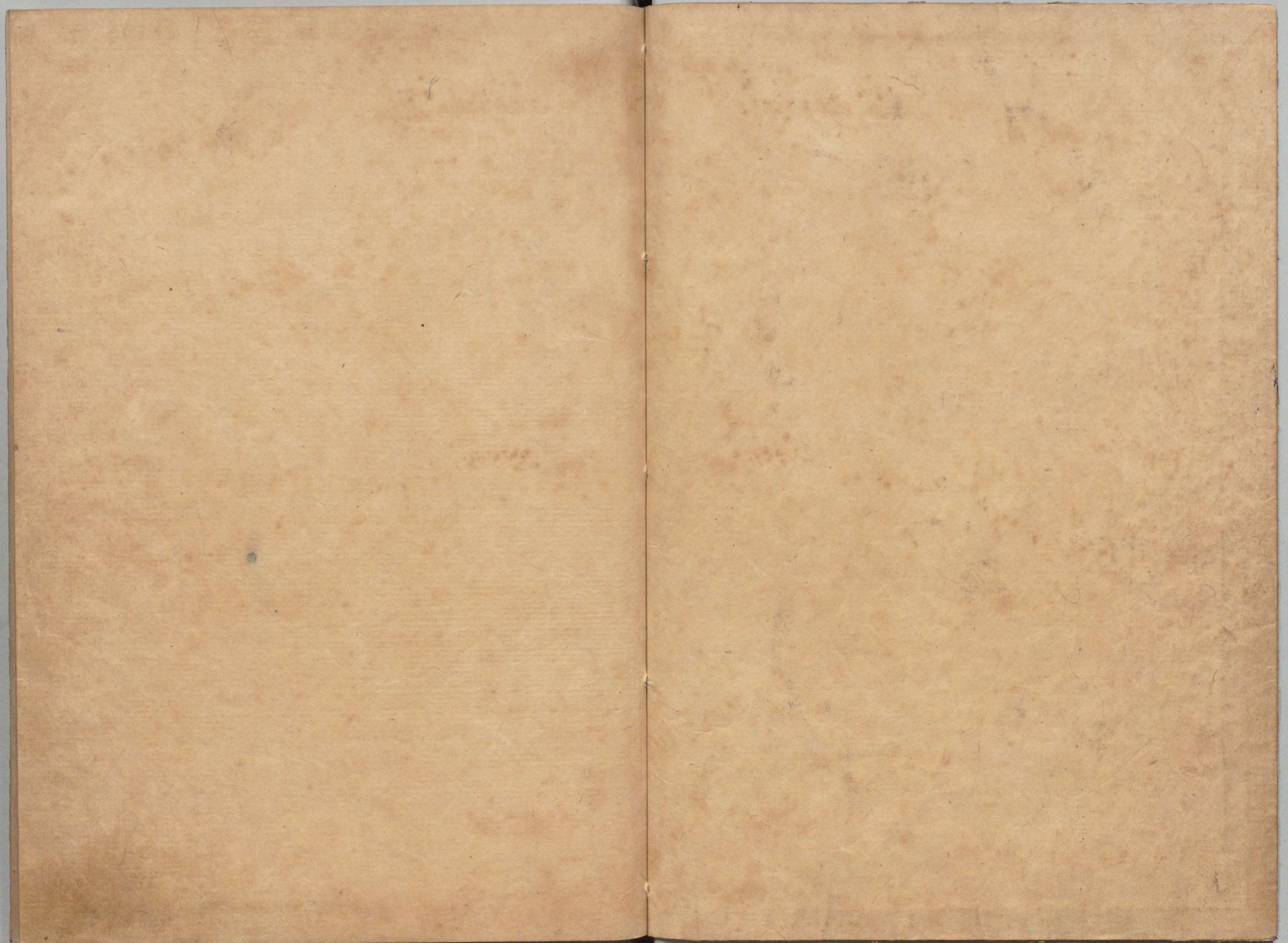
寛永諸家譜

大江氏
四卷之内

145

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (145)
函號	時 76 1





宮城

山村

寛永諸家系圖傳

大江姓

宮城

人皇五十七代

平城天皇

阿保親王

三品

孫正尹

贈一品

淺草文庫

本主

伯中守

堤立位下

大工師代姓と孫より後
あつて大枝船屋とす

名人

美濃

丹波播磨

近江守

冬藏左大辨

堤三位

貞親八年大枝と改めく大江とす

子星

興祿大巫 奇人古今下此作者

維明

此後系譜みくまが家傳りいふ維明の
後裔奥列りて赴て交城りて在位と
ありし御号とす

文城四郎

四郎の母小いしりく平政地
 孫倉りり斗り源頼朝りつふ
 正治二年奥列れ芝田次郎りせども
 奉らす時り四郎頼家れ命り
 奥列り後白り八月廿一日り首途
 一甘繩の宅りおき清和り系り

西南れ角り何作りと立居りくあり
 廣元頼房廊乃妻戸り出清使為
 孫り事れ中り石治り退常れ後
 頼玉りり清馬を給り

十月十三日文城四郎奥列り時
 去月十号りり合戦り遂晩りな
 芝田館りせめ落り家りりり
 清盛りりあがり孫代り將軍
 家りり清り源り氏真起り

果

なうびくく上落りし供をせせり
よりけく累代江列り衣冠と系譜
終失すふありし後嗣あり

山城寺 法名志連

某

中務少将 法名志親

重甫

次郎重兼 對馬寺 法名宗泉

雲屋

新坊

女子六人

堅南ツツナ

右兵衛尉

小名十おなと

織田信長おだのぶながよりひ豊后とよご秀吉ひでよしよりふ

法名宗職しゆしやく

正守まさもり

善馬ぜんま

某

新太郎

女子

女子

総かみ江え指さし太た東とう門もん妻つま

女子

三上勝左衛門妻

女子

豊盛

長次郎

丹波守

賢甫と同族なる少人賢甫が女
婿とて其の子となり秀吉よつふ

天正六年播磨三木此戰場とて
繼をあらせ敵の心をと家

同十八年相別小田原征伐乃時秀吉
供養山中の城とてひく先陣
と同進と鉄炮とていふとあり

朕邊とてら透り

文禄年中朝鮮征伐乃時對馬此浦
在番とて廿年所成とて子とて
又とて清遺物とて國吉此脇指

とあるまふ

天文長三年秀吉薨じ後

東照大権現の命とつけく是聖徳永

法下と杉杉く朝鮮渡海使節

を勸め徳勢帰朝代告と報と成り

なりは時

大権現より吳服羽織と成る

同四年四月十六日位下叙

丹波守より任

同十四年

大権現より

台徳院殿より福

同年十一月妻子と駿府より歸

石任

同十九年大坂陣乃時伯耆守

なるりあるく日暮るり事

わら分郭よりせめちる

十一月廿日鉄炮よりあし左

鼻脇より右に陰より小の月を辱
も之使と〜朝比奈源六と給る
翌年大坂陣の時豊盛和別り
こえ道明寺平野をすま、玉造老へ
もせむふ
元和五年 台命と頼り知玉院
乃山門とよび聖苑造管れをり
と勤心
翌年五月廿九日 年六十七少く

卒と 法名宗廣

頼久

小名長壽 大京進
實々山崎源太左衛門が次男なり山崎
を藤原氏なりを盛が智とあり
く家督とあり

天正十三年十月有格位下
一叙一 大京進一 任と初は

秀者ひさしよりつゝ秀者ひさし此遺物ゆいぶつと
く青江あおえ此刃やいばをく偏へんるる後

大権現おほいけんげんと云いふ

名徳院なとくゐん殿のりより行ゆく事ことある

長十一年ちやうじゅういちねん駿府しんぷ石垣いしがき菅徳すげんとくと勤と心
年ねん四よ十じゅうああく率ひらとく 法名ほふな覚かく院ゐん

豊嗣とよつぐ

十二部

玉膳たまぜん

生玉なまたま山城やましろ伏見ふし見

長十四年ちやうじゅうしよねん豊嗣とよつぐ五歳ごさい此母こと共とも

りのちお祖おぢ父ちちをを登のぼりしててひひ大坂おほさかあり

駿府しんぷよりいいつつ子こ同どう年ねん此こ春はる父ちち頼たの久ひさ率ひら

すすままみみむむししきき

大権現おほいけんげん乃の上かみ岡おかより達たつてて亡な父ちちがが家け徳とくをを

つつきき知ちりりききりりとといいへへりり幼こ女めれれるるは

祖そ父ちち養やしやう育いくすすままししののおおりりせせとといいふふ

同十八年どうじゅうはちねん六月りくごく朔しやくのの八はち日にちよりより去さるる

とといいふふ

漸入海毎^{ごと}り供^たちて江戸^にり
勤仕^{いん}と係^{けい}と廿六年

家乃紋と羽^うの蝶^{てつ}

果

山城やましろ守

法名しんせん志蓮

宮城みやぎ

是こゝ乃こゝ系けい藩はん文ぶん城じょう至し腰こし豊とよ嗣し
が下したりりみみここりり有ありり是こゝ乃こゝ

某

中務少輔

法名真親

重南

次郎左衛尉

對馬守

法名宗泉

重屋

新坊

女子

六人

貞治

忠左衛尉

豊臣秀頼より

慶長十六年三月廿七日より

法名元芳 道号并唐

宗玄

女子

賢祐

右左衛尉 法名宗賊 書八右田安藤守
の女

金茂坊

南照卷

後還候 一々南左衛尉 玄弘と号す

賢正

九左衛尉

蓮系院 れんぎえん

女子

六人

正室 まさむろ

對馬守 つしまのまもり

文利 ぶんり

利部大輔 りぶのたひふ

法名宗清 ほふなむねきよ

某

玄書 げんご

女子

長南 ながなみ 江列坂本の城主松本氏部大輔 えりうさかのむねぬし まつもとしんべの

女子

総江指太夫なまがえの尉 貞勝まことの妻

女子

三上庄屋みつがみの尉 古秀ふるひでの妻

女子

丹波たんばの豊盛ゆたかの妻

女子

池田伊勢いけだ いせの才さい 在あ兵衛べゑの妻 母はは黒川くろがわ
某なにかの女むすめ

女子

脇坂岩女わきざか いわめの妻 母は同おな

女子

筑後ちくごの正定せいじやうの妻 母は佐路さろ某なにかの女

女子

母同

長治 ながち

采女正 さいにょのま

実多三と在在集むねむねの士秀ししゅうが子なり伯父

正重ただしげと在在集むねむねの子なり

加賀かかの中納ちゆうなを利長りちやう及利常りじやう光あき

一いち所しよ之の武勇ぶゆうありふりりとと是こゝにに

附つ与よせせ候けう

正位 ただし

内藏うちざう元げん

実多三と在在集むねむねの士秀ししゅうが子なり伯父

正重ただしげと在在集むねむねの子なり

加賀かかの中納ちゆうなを利常りじやうなり

甚大東門

越花弓

寛文餘江槍大東門 貞勝子なり貞勝
 一子なり作本大東門 智義彌子
 此子後蒲生氏御が家よりあり
 其子秀吉播別と伝じらる付之城賢祐
 秀吉此幕下よりあり賢祐貞勝が
 舅しるふより一子貞勝と娘は招き
 秀吉より此子一子なりと貞勝は

一子娘海小は此時賢祐秀吉此命より
 一子とて去依國より卦を交りてとて
 病死と賢祐嫡子正守を此流と伝じ
 一子と貞勝と秀吉よりまみり
 此事ありてはすあり貞勝一人と
 なりて清野正女彌長政の娘なり
 あり貞列九郎一揆乃付清野長政より
 一子なり勇切あり後長政甲列と
 伝じらる付長政が命より一子とて嫡男

右京大夫幸長より殿と

長平年開ヶ原陣の時夜阜より

とひく勇名とぬ遊り開ヶ原より

討死とけ時對馬守正守病氣を大坂

より飛く開ヶ原より死ふことあり

より死より家人磯野左部右衛門と

二心なる旨と云ふことと

病少癒て開ヶ原より赴ん少くして

殊列より死ふ時より開ヶ原より

没落とあり凱旋後 御命より

池田三層門尉輝政より命と云はれ列に池田

苗小川佐治おれ一族ありなり

輝政乃室家

大権現此清安君と云んた女捨列あり

伏見よりより始ふ時より輝政此命

よりより供養と云ふことあり

大権現乃名徳より遠く大よ波感あり

け時正守一位此面と云はれ和甫と

一々

大控視りて得て〜

よ江戸より復て〜

よわ〜江戸より和甫〜

の女菊時小 崇源院殿此侍女〜

と〜川〜

名徳院殿此名徳〜

大久保相掾与忠隣と先客〜

和甫け〜

名徳院殿〜

糧米四百俵と〜

同十九年大坂江陣〜

河内殿乃時和甫〜

うか〜

翌年二月廿二日伏見〜

約命と〜

加判〜

と〜

むゆと云と云

元和元年大坂再乱此時使在

同二年六月

名德院殿乃修りて

將軍家より修りて

同立年福徳集乃史正則関國此

時和甫

將軍家此御使となりて伏見より

忠長御より本多新七郎使修り

和甫

名德院殿乃沙前よめし使節此赴き

と云て正則宅屋此休等と云と

返書と云

名德院殿并上主斗以正純と云

鎧江に改宮城と修りて

加へて是より宮城と修り

同八年七月

將軍家川越より源清此時修り

御目付となわく供奉還波比乃ち
上総一とひく陸地六百石とく
を尚ふ

寛永元年 御命あつて苗乃

母衣とあつるあつ

將軍身死瘞御病愴乃時書表殿中

勅使と

名徳院殿是と慶賀一給ひと綿衣

二給白銀二百両とす尚ふ

同九年

名徳院殿薨御乃時と使となわく

道春法下とあつり洛陽一と玉

三日とあつて京名と道春則侍

奏りしは

名徳院殿乃沙林号とす和甫板倉

周防守河部備中守が許りしと

京大坂全國に沙播代に士大吏等

あつしと江戸よあつ勅と

能く所ぐ又板倉月防とく東福院
より参候と是 上意よりつくり
同手

將軍家麾下諸士より銀子と給ふ時
和南白銀二子多と好飲と
同十年淺黄地より白子又此字の
差物と替りあり之後甲別よとひく
米地と名とくくくくく
同手三の丸田安津門此同よとひく

和南子宝地と好飲と是和南
これより 御城をよりより
あり

同手九月終り奉り御上御あり
一 道平より持世給ふ御矢箱 法炮
玉系乃草笥ホ入とこれ 土蔵火災
なり地とよりより
なり御上御あり御上御あり
と神奈河より比在河之橋蒲原田中

尾張乃熱田之介城江列膳
いふるもことくは是と沙汰

同年和負辨前与光高婚礼三ヶ日
此沙汰儀と和甫上使とて五百八十
の餅沖橋と十有沖者二十後と送り
あまふ時と利常法とをわつ
且伯第一文字此法城と此脇指と
和甫よりあふ

同十一年

將軍家沙上殿乃時麾下の士十二人
命とて道中の旅宿と割命とむ
和甫とて比秋山修理亮是と沙汰と
二月一日江戸とお祓糸河より入り
十日遠る一を遠る小倉場通路
等繪島と写し江戸より入り
伯時と清感ありと麻色此沙馬と
あふ

同年九月

將軍家日光御社參乃時供事同月
十六日今市御殿よりとひく 鈞命
とひくあり從五位下より鈞命
とひく
とひく

同十七日清社參此供事とほく
同十三年十月朝鮮の官使と鈞命
和甫及村越七と集り 鈞命とけ
とあり洛陽よりあり人吏八人傳
馬七之はとあり是京大坂道中

振籠橋遇此休と監察乃とあり
同十四年乃冬肥列五馬乃城よとひ
く吉利支丹一換輝起
聖年よりとあり

將軍家細川越中と志利松平左衛門作
忠之立花飛騨守宗茂瑞瑞に信濃と勝茂
と馬玄蕃以孝氏等とあり是と信濃也
しむ松平伊豆守信經と田左門氏鉄
元が物より正月十日和甫

了りしむく 津前より後へ御命
教條とすけし居たり 津屋下と
帯し石川跡處と同上使とあり
て肥列よりいさか同十八日大坂より
行く久貝因幡も曾我丹波も上使と
人より船と渡和甫より八六十挺をもち
石川より舟十挺をもちこれ紀伊
頼宣卿の船なり
十九日より船と浮といへとも同波穂

なすむありし廿六日より小倉小倉
翌日肥列寺井よりとひく鍋島勝茂
が船より乗廿八日馬より舟を並よ
信徳氏鉄が陣よりいさあり 上り
と岩論と二月一日忠利忠之等此
諸將と信徳陣より招集沙黒戸を
お見せしと上 御命此能と論し
め石川より渡りしとあり
同十七年

大指現御年忌

將軍家日光御社系供年此徳士命市
御殿の遊幸よりとむく後館と梅合
乃旨 仰よりぬり二月七日阿部
對馬守平左及より比和甫其地より
て出れと配命と庄田小左兼中川
半左衛門よりと是となりせむ

四月十六日

將軍家日光より御社系十七日御

なる者十八日より十九日小
社系其より還御あり酒井廣政守志勝
者良上野介兼承より比和甫 仰り
よりく復りしよりまわ北八日美部比
經ありと小御能被物等此諸事是
をなす

同十九年十一月八日御命小より大
目付と形あり小下段よりとひく子
石の地より加たまふ

和治

三戸藩の母と云ふに三戸藩士秀の女

將軍家より侍人となりてつり七百石

地を領す

寛永十六年七月歩行代頭となる

同十八年正月布衣と名を家事とす

ふしあり

貞正

幸助母同

一戸河志長よりつる

寛永十二年めし事なく

將軍家より侍人となりてつる

同十五年地を領す

宗勝

九吾兼尉母同

寛永十八年六月一日めし事なく

將軍家より侍人となりてつる

重勝

同十九年正月四日小石原に 法名清光

八郎を清尉 母同

寛永十八年六月一日より一ヶ月

將軍家より賜

同十九年六月廿日沙小姓經其書

を授けし

大勝

母同

寛永十八年十月三日

將軍家の終りより

竹千代君より授けし

女子

川形色三馬首宗玄の妻

女子

寛永十七年九月十日

女子

新庄内通助直治の妻

女子

女子

將軍家より

家乃紋と羽蝶の丸

實父の系譜

藤原

繪江

貞系

繪江万介

江列 芝智那 繪江の城より傳へ

先祖は地よりとむくまひに宮と勅語

今よこむくあり繪江三箇村岸本

沙園州法与名小路七々村に居ては外

栗田村ハ附庸の地なり

貞系作本石京大支養賢が旗なり

あり

永祿十一年系祖親吉と没病は系

貞系系祖と我旗より入心栗田

修理亮勝家系祖と襲攻よりあり

甲寅より一平り貞系が曾中在石垣

籠り入貞系是より去るまで

貞利

又八郎

江列騒乱の時繪江は城より籠り孫と

念ふる所旗とあり城中和節謀と

めどと武威と振栗田と屢戦ふ

討り小川吉佐与脇坂基内援兵と如
てたりあり貞利と和睦と改より
貞利は地を退て江列を原常樂寺
に所築田貞利が勇と威と後貞利
と越列より拓和賀の國よとひく地
と授け後貞利江列より入んと
く加列手取川一揆蜂起の時討死

宗甫

川那邊 主馬首
本願寺門迄乃取せと如
妻ハ下回利部卿法下が女

宗玄

川那邊 主馬首 妻ハ宮城越前が
女 法名宗八

女子

須田三郎 重成しげなりの妻
実まこと七郎しちらの定親さだちかの子なり

貞勝まこと

権七郎けんしちら尉

長治元年九月十日 開ヶ原ひらより
とみく討死 法名松雲しょううん

貞急まこと

頼山よりやま乃僧のそう 南院なんえん坊ぼう河内かみ梨りと号なづし
江列えりつ池いけ寺でら百済ひやくさい寺でら等ら此こゝ主ぬしなり

資親すけちか

須田すけだ七郎しちら尉

須田長すけだちか乃の重しげの子ことなり 淡路あわじ陣ぢん正ただの彌や
長政ちかまさと号なづし 紀伊きい守もり幸ゆき長ちかと号なづし

教度の式部よりよりく足性を
あづけらるる

定親

七左衛門尉

淡路但馬守長藏よりとび松平安親守

光藏よりとび

女子

森又左衛門の妻 後目貞田修理亮より
嫁と 法名より云

女子

駒井掃部次郎の妻

貞頼

甚右衛門尉 越前守
信よりとびみえよりとび
後和甫と改む

家
乃
紋
園
内
三
栢

山村

大江の定基の苗裔江列山村の郷小
つり居と是よりさうく山村と
号とけ後世系断絶と

良道

長崎村

良利

三河守

享長四年九月六日死し、歳八十六
法名宗英

良作

三河守尉

享長七年十一月廿日死し、歳廿九

法名道勇

良勝

基之弟

本曾任務より、此之く、臨位と称す
子息仙三郎が世より、流落して
他方より、移住す

享長五年

大権現系勝と、御征伐の時、小山にて

幼くおされ得見
一々くまひふ
比時石河俊あまの代官とあり
石田治部が捕り居しと本番跡に
生還とて人びとに是よりよわく

大権現良勝よりおれせくのうましく汝
うく本番に案内とてあはすみくふ
本番よりいりしと相持り是と
もふべしとてくらしと本番下と
本番に徳傳等よりたまふ良勝是も

ちく本番よりいりしと徳傳とたはしり
て石河が兵とやがる

大権現御感悦にあまの御書と良勝よ
たまふ比時剛治兼石田治部が捕り居
しと濃列苗本に城とまの良勝並
り濃列よりいりしと城とけし家
又田丸中務が捕り居しと回国
岩村に城より新なる良勝換使に等と
又生く城と清永に忠切よりいりしと

大指現とてび

名徳院殿法書とたまたま日と念とて

名徳院殿中山道より御進殿なりとて

大徳志功よりより福見よりより

御膳物とてお徳と天下一統より

大指現大坂よりよりたまたま時大徳功よ

よりより徳人よりより名徳園よ

とてとて徳知とてとて

寛永十一年八月より名徳とて歳七十一

法名宗用

良弘

庄次郎

家紋丸の内一文

